

中学校 英語

中学校英語科の「書くこと」における表現力の
育成を目指した指導法の研究
－「読むこと」と「書くこと」を関連させた活動を中心にして－

義務教育課 研究員 細越 周作

要 旨

本研究は、「書くこと」における表現力の育成を図る指導法を探るものである。「読むこと」と「書くこと」を関連させた活動を中心に、「『書くこと』における表現力育成のための活動」を体系的にまとめ、「教科書本文を活用した指導プログラム案」を作成した。検証した結果、まとまりのある文章を書く力や自分の考えや気持ちを表現する文を書く力などの向上が見られた。

キーワード：中学校 英語 書くこと 読むこと 表現力

I 主題設定の理由

筆者は、これまで指導してきた中で、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能のうち、つまずきが多く見られる技能が「書くこと」であると感じていた。青森県教育委員会が実施した、平成22年度青森県学習状況調査の設定通過率と実際の通過率について見てみると、「聞くこと」は72.5%に対して70.1%、「読むこと」は65.0%に対して75.1%となっているが、「書くこと」は54.1%に対して41.7%と大幅に下回るという結果が示されている。さらに、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会外国語専門部会（平成19年9月）の配付資料でも、「基本的な語彙や文構造が十分身に付いていない、内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力が十分身に付いていない状況なども見られる」と指摘されているように「書くこと」に関しての課題が挙げられている。

平成20年3月告示の中学校学習指導要領（以下、「新学習指導要領」という。）では、小学校で外国語活動が導入されることも踏まえ、従来の音声重視ではなく4技能をバランスよく育成し「コミュニケーション能力の基礎を養う」という目標が設定されている。そして、中学校学習指導要領解説外国語編（平成20年9月、以下、「新学習指導要領解説」という。）においては、各技能を個別に高めるのみでなく、各技能のつながりを意識して総合的な力を育成する視点をもつことが大切であると述べられている。

以上を踏まえ、生徒が英語をアウトプットするためにはインプットが重要であり、文字によるインプットとアウトプットを意識的に関連付けた活動、つまり「読むこと」と「書くこと」を関連付けた活動を中心にして指導することで、生徒の「書く力」を高めることにつながられるのではないかと考え、本研究の主題を設定した。

II 研究目標

本研究は、中学校英語科の「書くこと」における表現力の育成を図る指導法を探るものである。「書くこと」における表現力の育成を図るためには、まとまった内容の英文を読み、要約したり感想等をまとめたりする活動を取り入れるなど、「読むこと」と「書くこと」を関連付けた活動を中心にして指導することが有効であることを実践を通して明らかにする。

III 研究仮説

中学校英語科の「書くこと」の指導において、教科書本文の内容に合わせた「読むこと」と「書くこと」を関連させた活動を中心にした指導を取り入れれば、「書くこと」における表現力が高まるだろう。

IV 研究の実際とその考察

1 研究の内容

(1) 本研究での「『書くこと』における表現力」の定義

新学習指導要領では、文構造や語法の理解が十分でなく、正しい文が書けないという課題、内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力が十分でないという課題に対応して、「書くこと」の指導事項に「語と語のつながりなどに注意して正しく文を書くこと」や「自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと」が新たに示された。

また、近年の中学校卒業段階の生徒に求められている「書く力」を具体的に知るために、都道府県公立高等学校入学選抜学力検査問題を幾つか調査した結果、読み手を意識したコミュニケーション手段としての「まとまりのある文章」を書く力が求められている傾向があることが分かった。

以上を踏まえ、本研究では、「『書くこと』における表現力」を「学習段階に応じ、自分の考えや気持ちなどをまとまりのある英文で書き表し、読み手に正しく伝えることができる力」と定義した。

(2) 「読むこと」と「書くこと」の関連について

中学校外国語科における新学習指導要領の改訂の要点として、新学習指導要領解説では「四つの技能を総合的に育成する」上で、コミュニケーション能力の基礎を養うことが挙げられている。例えば、新学習指導要領「外国語 第2 2 内容 (1) 言語活動 ウ 読むこと」の(オ)については、単に聞いたり読んだりした英語を理解するだけでなく、自分の考えなどを他者に伝えられる技能・態度を育成することが大切であること、また、「読むこと」をそうした活動とするためには、読み手として主体的に考えたり判断したりしながら、話の内容や書き手の意見などを適切に理解していくことが必要であることが述べられている。さらには、学習段階に応じ読んだ後に既習の表現を用いて、読み手としての感想や意見、賛否及びその理由を表現するといった活動を計画的・系統的に行わせることが大切であることも述べられている。

以上のことから、系統性をもった計画に基づき、「読むこと」を「書くこと」に関連させた活動を中心にして「書くこと」における表現力の育成を目指すことは、コミュニケーション能力の基礎を養う上で一つの効果的な指導法となり得ると考えられる。

なお、本研究においての「読むこと」とは、教科書本文や自分の書いた英文など様々な対象を黙読や音読する活動を指す。

(3) 「読むこと」と「書くこと」を関連させた活動を中心とした指導プログラム案について

本研究では、「書くこと」における表現力の育成に有効であると考えられる活動を組み合わせ、体系的な指導につなげるため、図1に示すように「教科書本文を活用した指導プログラム案」を作成した。この指導プログラム案において、指導の中心となる「イ 『書くこと』における表現力育成のための活動」は、「読むこと」と「書くこと」を関連させた活動を中心にして、効果的なインプットのための読む活動や、英語の段落形式を学ぶための活動を組み合わせ、目的別にCからKの九つのカテゴリーに分類した。さらに、その前段階として内容理解や語彙、表現の定着を図るための「教科書の全単元に対して行う活動」をA、Bに配置した。活動はそれぞれのカテゴリー内、または全体を通して基本的なものから発展的なものへとなるように指導段階を考慮している。この指導プログラム案の中から、生徒の学習段階及び教科書本文の特性を考慮し、1単位時間ごとに最

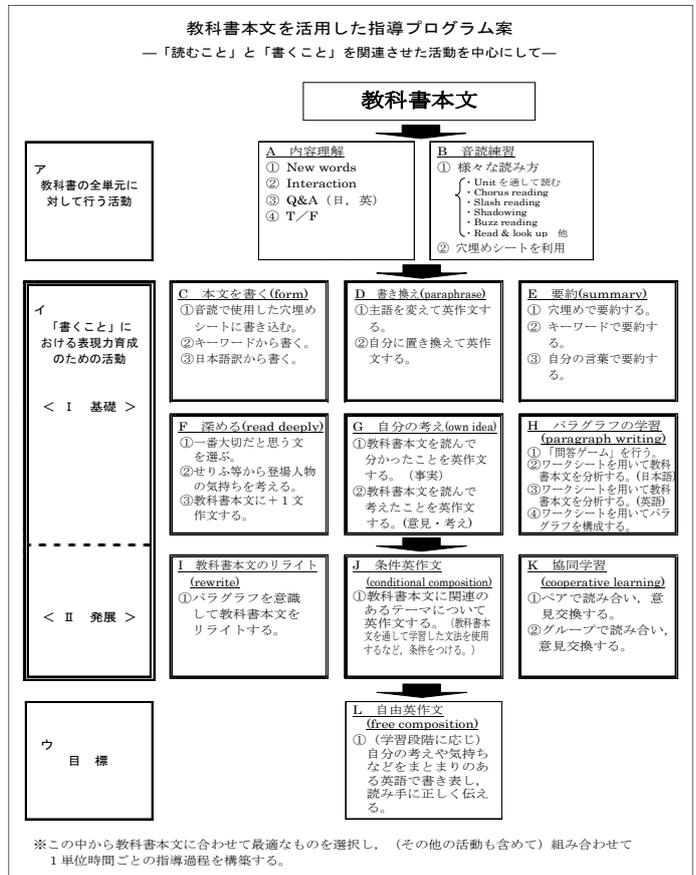


図1 教科書本文を活用した指導プログラム案

適な活動を幾つか選択，実施することで「『書くこと』における表現力」の育成につながられるのではないかと考えた。この指導プログラム案に取り入れた活動を，図1の記号順に説明する。

ア 教科書の全単元に対して行う活動

A 内容理解

教科書本文が生徒にとって語句や文の有効なインプットとなるためには，語句の意味や本文の内容理解が先決である。そこで，ここでは語句の意味の理解や定着を目指す活動，Interaction やQ&A 等の教科書本文の内容理解を図る活動を設定している。

B 音読練習

音読は「読むこと」「書くこと」の学習において基礎となるものである。鈴木寿一（2009）は，心理言語学，脳科学の分野から音読の有用性を述べている。音読によって文字と音が結び付けられ，語彙や表現のより効果的なインプットが期待できる。ここでは，多様な音読練習を設定している。

イ 「書くこと」における表現力育成のための活動

< I 基礎 >

読んだ教科書本文を基に，英文を「書く」ことに対する慣れや正確さ，内容構成力の向上などを図る活動である。段階を経て，自分の考えや意見等を書くことへとつながるように構成した。

C 本文を書く (form)

学習した語句や文法等が使用されている教科書本文を読み，書く活動を通してインプットを目指す。ここでは，東谷保裕（2009）を参考に，次の三つの活動を設定している。

- ①音読で使用した教科書本文の穴埋めシートに書き込む。
- ②教師が提示したキーワード（英単語）を基に本文を書く。
- ③日本語訳を基に英語で本文を書く。

D 書き換え (paraphrase)

教科書本文をモデルにしての書き換えにより，「C 本文を書く」で学習した英文から，更に表現の幅を広げることを目指す。主語など一部を変えて書き換える活動により，実践的な文法運用能力が高まると考えられる。また，主語を自分に置き換えることにより，自己の表現へとつなげていく最初の段階となる。ここでは次の二つの活動を設定している。

- ①主語を変えて英作文する。
- ②自分に置き換えて英作文する。

E 要約 (summary)

ある程度まとまりのある文章を要約するには，内容を理解して主題や筆者の主張などの要素を読み取る力が必要となる。さらに，読み取ったことを英語で書き表す力の育成を目指す。ここでは，東谷保裕（2009）を参考に，次の三つの活動を設定している。

- ①教師が用意した要約文を穴埋め形式で埋める。
- ②教師が提示したキーワード（英単語）を基に要約する。
- ③自分の言葉で要約する。

F 深める (read deeply)

教科書本文から一番大切な文を選んだり，せりふ等から登場人物の気持ちを考えたりすることは，深く読むことになり語句や文の効果的なインプットにつながると考えられる。また，教科書本文の内容に自分で続き等を考えて書き加える活動で，英文の形式 (form)，意味 (meaning)，機能 (function) を確かなものにしながら表現の幅を広げていく。ここでは，太田洋（2010）を参考に，三つの活動を設定している。

- ①教科書本文から一番大切だと思う文を選ぶ。
- ②教科書本文のせりふ等から登場人物の気持ちを考える。
- ③教科書本文に自分の考える続き等を1文書き加える。

G 自分の考え (own idea)

自由英作文の指導をする際，生徒から「何を書けばよいのか分からない」という質問が出されることがある。教科書本文の内容に対して以下の点について考えることにより，自分の意見や考えを表現することに慣れることを目指す。学習段階によっては日本語で考えをまとめてから英文に直したり，最初から英文で書き表したりすることが考えられる。ここでは，次の二つの活動を設定している。

- ①教科書本文を読んで分かったこと（事実）を英作文する。

②教科書本文を読んで考えたこと（意見・考え）を英作文する。

H パラグラフの学習 (paragraph writing)

パラグラフ形式を学ぶことは、英語らしい「まとまりのある英文」を書くことにつながると考える。ここでは、三森ゆりか（2009）の「問答ゲーム」を参考にして書く内容を組み立てる学習をし、さらにワークシートを用いた教科書本文の分析や英作文の構成案作成につなげることにより、パラグラフの考え方と構成方法を段階的に学ぶ。

具体的には、英作文の構成案作成の場合、教師は「主張は最初に述べる。次に理由、そして最後にまとめの言葉を入れる」というパラグラフ形式を指導した後、問いに対して生徒に1人称の主語を入れて口頭、または記述で返答させる。ここでの返答が問いに対する主張となるため、教師は「なぜ」を中心に、5W1H（いつ、どこで、だれ、何、何のため、どのように）などの質問を続け答えさせることによって、主張を支える根拠を組み立てさせていく。図2は、生徒が自分で進められるように作成したワークシート例である。全体をまとめた言葉で自分の主張を締めくくるように指導し、最後に、教師が用意したマッピングを基にしたワークシート（図3）に記入することにより、自分の主張をパラグラフ形式にのっとった作文の構成案（日本語、または英語）としてまとめさせる。ここでは、次の四つの活動を設定している。

- ①「問答ゲーム」を通して主張の根拠を組み立てる。
- ②ワークシートを用いて教科書本文を分析する。（日本語でまとめる。）
- ③ワークシートを用いて教科書本文を分析する。（英語でまとめる。）
- ④ワークシート（図3）を用いてパラグラフを構成する。（英作文の構成案を作成する。）

<II 発展>

<I 基礎>の活動において学習した内容を踏まえ、よりレベルの高い自由英作文を目指す活動である。さらに、「読み手」への意識や「書くこと」への意欲を高めるための活動も設定している。

I 教科書本文のリライト (rewrite)

「E 要約」で学んだ要約の考え方と「H パラグラフの学習」で学んだパラグラフ形式での構成を用いて、教科書本文を書き直す活動である。例えば、教科書本文にある登場人物の会話を基に、第三者の立場に立って登場人物の行動を書き表す活動などが考えられる。

- ①パラグラフを意識して教科書本文をリライトする。

J 条件英作文 (conditional composition)

本研究では、教師により指定されたテーマについて書くことや既習の文法事項を使用することなど、書くべき内容や使用する文法事項に関して何らかの条件の下に行う英作文を「条件英作文」とする。

<I 基礎>で行う英作文と比べ、自由度が増すため難易度が高くなるが、教科書本文に関連のあるテーマを設定することにより、生徒は教科書本文の語句、文、内容を参考にすることができる。また、学習した文法事項等を使用するように条件を設定すれば、生徒が実際に学習内容を活用する機会にもなる。教師は、明確な意図をもって条件を設定することが必要である。

- ①教科書本文に関連のあるテーマや内容について英作文する。（教科書本文を通して学習した文法事項を使用するなど、条件を付ける。）

K 協同学習 (cooperative learning)

協同学習とは、「学習者を小集団に分け、その集団内の互恵的な相互依存関係を基に、協同的な学習活動を生起させる技法」（涌井恵，2006）である。本研究では、読み手の存在を意識させるため、書いた英文を生徒同士で読み合い、感想や意見を交換するピア・フィードバック活動を行う。このピア・フィードバック活動については、「自分の思いや考えを適切に書くことへの意欲を高めることにつながった」（上杉美恵子，2007）といった実践報告もあり、文章を書くことに対する生徒への意欲付けも期待できる。

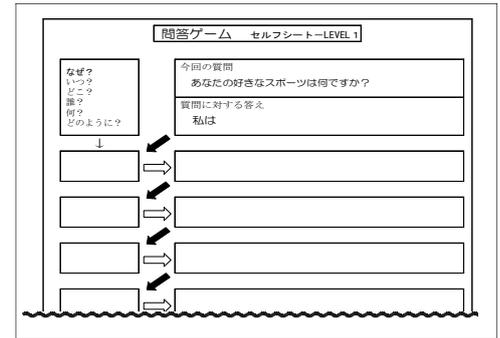


図2 「問答ゲーム」のワークシート例

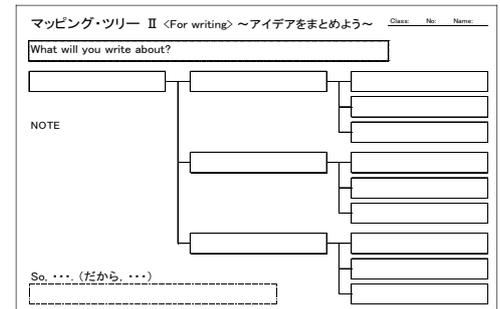


図3 マッピングを基にしたワークシート

- ①ペアでお互いに書いた英文を読み合い、生徒同士で意見交換する。
- ②グループでお互いに書いた英文を読み合い、生徒同士で意見交換する。

ウ 目標

Ⅰ 自由英作文 (free composition)

ある程度まとまりのある文章を生徒に書かせる際、小菅和也 (2010) が述べているように、accuracy (正確さ) と fluency (流ちょうさ) のバランスを考えたり、松畑熙一 (2000) が挙げている、cohesion (結束性) や coherence (一貫性) の育成を意識したりしての指導が必要であるとする。自由英作文においても、教師はこれら四つの要素のうちどれを目的とするのかを明確にすること、そして、生徒にもその目的を理解させた上で活動に取り組ませることが必要である。

- ①自由英作文を書く。

(4) 長期的な視点での指導について

「書く力」の育成において、長期的な見通しをもった、系統的な計画に基づく指導を行うことが有効であると考え、本研究で設定した『「書くこと」における表現力育成のための活動』に関し、自由英作文と合わせ各活動の難易度や生徒の学習段階を考慮した上で、図4に示すような年間の指導計画を作成した。なお、図4の「活動」のCからL及び①から④は、図1の「教科書本文を活用した指導プログラム案」に一致させている。

単元	活動	C		D		E		F		G		H		I		J		K		L	
		①	②	③	①	②	①	②	③	①	②	③	④	①	②	③	④	①	②	③	④
Warm-up		○																			
Unit 1		○	○			○			○	○											
Listening Plus 1								○													
Writing Plus 1					○								○					○			
Unit 2		○	○	○		○	○			○	○		○								
Listening Plus 2																					
まとめと練習 1				○																	
Speaking Plus 1					○																○
Unit 3		○	○	○	○	○	○		○	○	○		○	○							
Listening Plus 3										○	○										○
Writing Plus 2																					○
Multi Plus 1				○	○								○	○							○

※○は、実施する予定の活動。
 ※◎は、区切りごとに重点を置く活動。区切りは、新出文法や場面等の単位でつけている。
 ※☆は、検証授業のために配置した活動。

図4 「『書くこと』における表現力育成のための活動」の年間指導計画の一部

2 検証授業の実際

平成23年7月4日から、むつ市立田名部中学校第2学年の2学級において、図4の指導計画に基づき検証授業を実施した。題材には、「NEW HORIZON English Course 2」(東京書籍)の“Unit 3 E-pals in Asia”、及び“Listening Plus 3”を使用した。

なお、検証授業において実施した「教科書本文を活用した指導プログラム案」中の活動は、表1のとおりである。

また、自由英作文による事前テスト及び事後テストを実施し、検証授業前後の生徒の「『書くこと』における表現力」に関して分析を行った。

さらに、各活動を通しての意識の変化を調べるために質問紙による意識調査も実施した。自由英作文と意識調査の分析の対象とした生徒は71人である。

3 検証の結果と考察

以下では、生徒の書いた英文の「『書くこと』における表現力」に関して分析した結果を基に、検証授業で実施した「教科書本文を活用した指導プログラム案」の主な「『書くこと』における表現力育成のための活動」の有効性について考察する。

検証授業では、教科書本文を読み「F-① 一番大切だと思う文を選ぶ」や「F-② せりふから登場人物の気持ちを考える」などの活動を通して、語句や文のインプットを図った。また、「D-① 主語を変えて英作文する」のような、本文を基にしたながらも少しずつ本文から離れていく活動を通して、段階的に自己表現へつなげた。事前と事後に生徒が書いた英文中の単語と教科書本文中の単語との一致割合を調査した結果、事後テストでは一致している割合が高

表1 検証授業における実施活動一覧

時間	単元	教科書ページ	実時間	実施する「教科書本文を活用したプログラム案」中の活動または主な内容
	・事前調査		30分	・事前アンケート(意識調査) ・事前テスト(自由英作文)
1	・Unit 3 Starting Out	p. 22	45分	・〈A〉〈B〉新出語句、本文の内容理解、音読練習
2	・Unit 3 Starting Out ~ Dialog	pp. 22-23	45分	・〈A〉〈B〉新出語句、本文の内容理解、音読練習 ・〈D-①〉主語を変えて英作文する。 ・〈G-①〉教科書本文を読んで分かったこと(事実)を英作文する。 ・〈H-①〉問答ゲームを行う。
3	・Unit 3 Dialog	p. 23	45分	・〈A〉〈B〉新出語句、本文の内容理解、音読練習 ・〈D-②〉自分に置き換えて英作文する。 ・〈E-①〉教師が用意した要約文を穴埋め形式で埋める。 ・〈F-①〉一番大切だと思う文を選ぶ。 ・〈F-②〉せりふから登場人物の気持ちを考える。
4	・Unit 3 Reading for Communication ①	p. 24	45分	・〈A〉〈B〉新出語句、本文の内容理解、音読練習 ・〈E-②〉教師が提示したキーワード(英単語)を基に要約する。 ・〈H-①〉問答ゲームを行う。
5	・Unit 3 Reading for Communication ②	p. 25	50分	・〈A〉〈B〉新出語句、本文の内容理解、音読練習 ・〈C-①〉音読で使用した穴埋めシートに書き込む。 ・〈E-①〉教師が用意した要約文を穴埋め形式で埋める。 ・〈H-②〉マッピング(ワークシート)を用いて本文を分析する。(日本語でまとめる) ・〈G-①〉教科書本文を読んで分かったこと(事実)を英作文する。
6	・Listening Plus 3	pp. 26-27	50分	・〈A〉〈B〉新出語句、本文の内容理解、音読練習 ・〈D-②〉自分に置き換えて英作文する。 ・〈F-③〉教科書本文に1文書き加える。 ・〈G-①〉教科書本文を読んで分かったこと(事実)を英作文する。
7	・自由英作文		50分	・〈B〉音読練習 ・〈H-①〉問答ゲームを行う。 ・〈H-④〉マッピング(ワークシート)を用いてパラグラフを構成する。 ・〈L-①〉自由英作文
8	・ピア・フィードバック ・教師によるフィードバック ・書き直し		50分	・〈B〉音読練習 ・〈K-②〉グループで読み合い、意見交換する。 ・教師によるフィードバック ・書き直し
	・事後調査		30分	・事後アンケート(意識調査) ・事後テスト(自由英作文)

まり、表2に示すとおり有意差が見られた。この結果から、生徒は教科書本文を深く読んだり、参考にしながら英文を書いたりするうちに語句や文のインプットが進み、英文を書く際に、自分の述べたい文章へと応用させ書き表したと考えられる。英語学習の入門期である中学生にとって、モデルとなる英文を基に自己表現へとつなげていく段階的指導は、「書くこと」における表現力を高めることに効果的であると考えられる。

また、図5に示した英文は、生徒Aが「D-② 自分に置き換えて英作文する」活動で書いたものである。このような活動で、「自分ならどう答えるか」を考えた上で書き表すことにより、他人の表現から自分の考えなどを表現することにつながる。本研究では、検証授業の中で生徒が書いた英文を分析した結果から、likeやwantのような「感情を表す動詞」とfun やinteresting のような「感情を表すと考えられる形容詞及び主観により判断されると考えられる形容詞（以下、「感情・感覚形容詞」という。）」を用いることにより、生徒は自分の考えや気持ちを英文で表現していると判断した。従って、今回は事前テストと事後テストの「感情を表す動詞」及び「感情・感覚形容詞」を調査し、「自分の考えや気持ち」を表現している割合として比較した。分析の結果、「感情を表す動詞」は事前と事後において有意差は見られなかったが、表3に示したとおり、「感情・感覚形容詞」の語数は事後で増加しており、有意差が見られた。その要因として、本文を参考にしながら、「私(I)」を主語にして英作文する活動が効果的であったと考えられる。

次に、まとまりのある英文を書くことを目指す活動を幾つか実施した。まず、図6に示したように、「H-① 問答ゲームを行う」で課題に対する自分の主張や、その主張を支える根拠などのアイデアを出す活動を行った。ここでは、ワークシートを作成し、自分で問いを選び、答えていくという方式をとった。次に、「H-④ ワークシートを用いてパラグラフを構成する」活動で構成案を作成した。その際、「問答ゲーム」で挙げたアイデアを内容ごとにワークシートに配置しながら構成を組み立てた。生徒Bは「問答ゲーム」の結果を踏まえ、図7のように構成案を完成させた。最後に、その構成案を基にして英文を書いた。この時間は、辞書や教科書を活用して語句を調べたり、文法や表現で分からないことなどは教師に質問をしたりさせた。また、必ずしもワークシートに記入したとおりである必要はなく、英文を書きながら内容を付け足したり、逆に省略したりしてもよいと指導した。その結果、生徒Bは「L-① 自由英作文を書く」活動で、図8のようにパラグラフが意識されている英文を書いた。

以上のような「教科書本文を活用した指導プログラム案」による指導の後に生徒が書いた英文の特徴として、パラグラフ形式で書かれた、結束性のある英文が増えたことが挙げられる。例えば、図9に示した生徒Cの英文は、事前テストでは「She is ~.」という同じような文が繰り返され、それぞれにつながりのない文が書かれている。それに対し、事後テストでは「主張、理由、まとめ」というパラグラフ形式で書こうとしているのが分かる。このようなパラグラフ形式で英文を書いた生徒は、図10のとおり増加していた。これは、先述の「H-① 問答ゲームを行う」活動や「H-④ ワーク

表2 教科書本文と一致している単語の割合の t 検定結果

	事前平均 (%)	事後平均 (%)	t 値	p
単語の一致	49.0	67.8	-10.04	p<.001

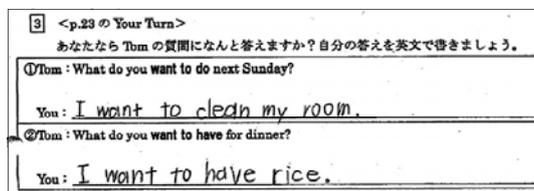


図5 生徒Aの「D-②」の英文

表3 「感情・感覚形容詞」の語数の t 検定結果

	事前平均 (語)	事後平均 (語)	t 値	p
感情・感覚形容詞	0.4	0.9	-3.62	P<.001

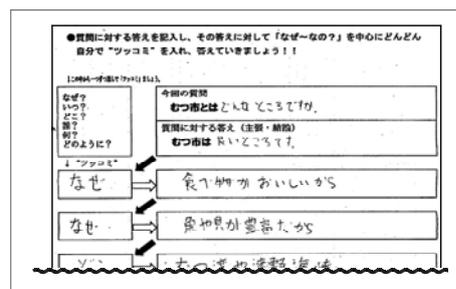


図6 生徒Bの「H-①」のワークシート

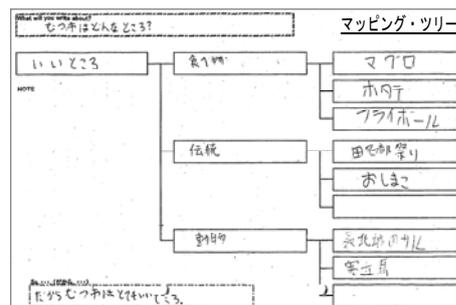


図7 生徒Bの「H-④」のワークシート

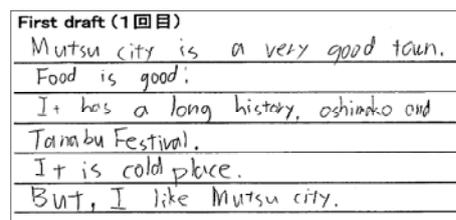


図8 生徒Bの「L-①」の英文

シートを用いてパラグラフを構成する」活動による効果であると考えられる。

また、接続詞、主格の代名詞、語数、文数を事前と事後で比較した結果は、表4のとおりである。事後テストにおいて文数や主格の代名詞が減少したのは、図9の例のように同じような文の単純な繰り返しがなくなり、語や文が精選されたためであると考えられる。また一方では、パラグラフを意識してまとまりのある文章を書かなければならないという意識が生じたことにより、意識調査の「英語を書くことは簡単だと思う」に対する肯定的な回答が、26.8%（事前）から18.3%（事後）へと減少したことにつながったと考えられる。

さらに、事後の意識調査で、検証授業で実施した14種類の「『書くこと』における表現力育成のための活動」のうち、英作文をするときに役立ったと思うものを複数選択で回答させたところ、図11に示す結果となった。71人中48人が役立ったとして選んだ「H-① 問答ゲームを行う」については、検証授業の感想等を述べる自由記述欄でも、「問答ゲームで自分が考えたことを整理して英作文を書く、前よりスムーズに書けるようになった」といった、肯定的な意見が複数見られた。また、「F-③ 教科書本文に自分の考える続き等を1文書き加える」活動でも4分の1の生徒が役に立ったと回答していることから、継続して各活動を実施していくことにより、前より書けるようになったという意識や、もっと書きたいという意欲の向上につながるのではないかと考えられる。

しかしながら、生徒の英文中の単語の綴りや文法的正確さに関しては、今回は事前と事後で有意差は見られなかった。学習した語や文を実際に活用させるような工夫をしたドリル活動などを適切に取り入れることで、正確さの向上にもつながっていくと考えられる。

V 研究のまとめ

「『書くこと』における表現力育成のための活動」を体系的にまとめ「教科書本文を活用した指導プログラム案」を作成し、検証授業を実施した結果、「『読むこと』と『書くこと』を関連させた活動」を中心にした指導は、「書くこと」における表現力の「質」の向上につながる事が明らかとなった。特に、図1の「H パラグラフの学習」の活動を通して、パラグラフ形式で全体を組み立てることと接続詞を効果的に用いることができるようになり、まとまりのある文章を書くことにつながった。また、事実を述べるだけでなく、自分の考えや気持ちを表現する文を多く書くことにつながった。

一方、今回の検証授業では、単語の綴り及び文法における「正確さ」や、語数や文数といった「量」を有意に向上させるまでには至らなかった。教科書本文などのモデルを参考にして模倣する活動から、段階的に自己表現へとつなげていく活動を繰り返すことにより、英文の「質」と「量」の更なる向上につながるのではないかと考えられる。そして、「書け

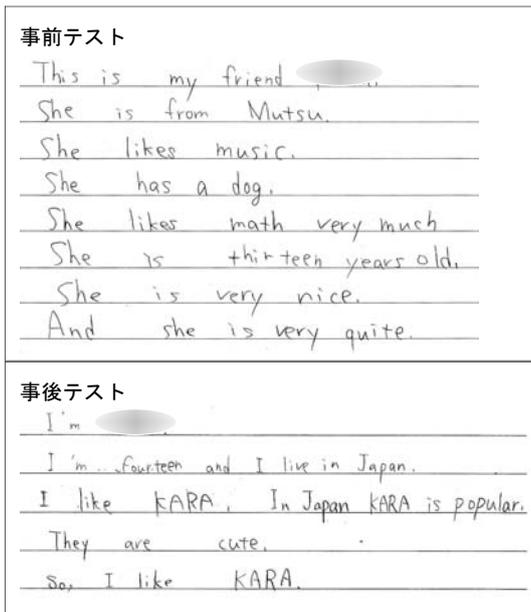


図9 生徒Cの事前・事後テストの英文

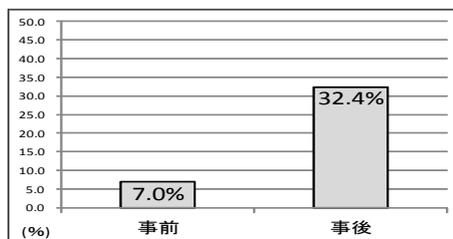


図10 パラグラフ形式で書いている生徒の割合

表4 接続詞、主格の代名詞、語数、文数のt検定結果

	事前平均	事後平均	t 値	p
接続詞	0.5 %	2.8 %	-4.84	p<.001
主格の代名詞	4.3 語	0.9 語	13.73	p<.001
語数	17.1 語	15.9 語	1.08	n. s.
文数	4.7 文	3.8 文	3.16	p<.01

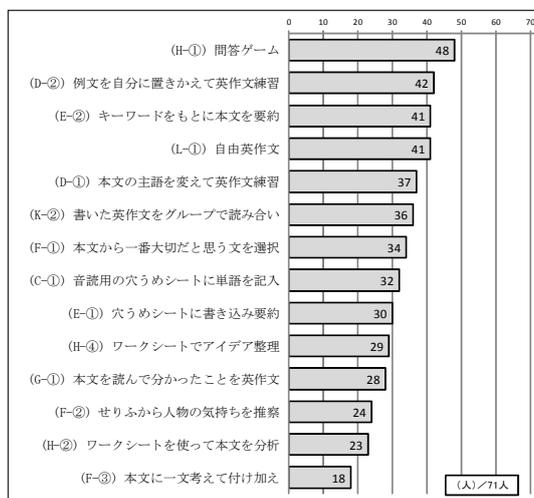


図11 英作文に役立ったと思う活動

た」という成功体験を重ねることによって、今回は見られなかった読み手に対する意識や、もっと英文を書けるようになりたいという意欲の向上にもつながっていくと考えられる。

VI 本研究における課題

本研究では、「教科書本文を活用した指導プログラム案」の「『書くこと』における表現力育成のための活動」に関して、長期的な見通しをもち系統的な計画に基づく指導が効果につながるとの考えから、年間指導計画を作成した。今回は、長期的な計画の中の一部においての検証となったため、継続して指導を行った場合、生徒の英文にどのような変化が現れるのかは明らかにできていない。

また、「『書くこと』における表現力育成のための活動」を精選し、より効率的な指導プログラムを構築していくことが必要である。そして、生徒の実態を的確に把握し、適切な活動を選択、実施することで、より効果的な指導へとつながっていくものと考えられる。

さらに、今回の指導プログラム案は、「『書くこと』における表現力育成のための活動」に特化させたものであるが、書いた英文をスピーチにつなげたり、スピーチを聞いて感想を書いたりするなど、他の技能との関連も考えていくことで「4技能の総合的な育成」が図られると考える。

<引用文献>

- 文部科学省 2008 『中学校学習指導要領（平成20年3月告示）』， pp. 105-106
文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説 外国語編（平成20年9月）』， p. 4

<引用URL>

- 文部科学省 2007 「中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会外国語専門部会第18回議事録配付資料4」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryu/07100309/002.htm (2011. 12. 26)
涌井恵 2006 「協同学習による学習障害児支援プログラムの開発に関する研究」『平成14年度～平成17年度文部科学省科学研究費補助金（若手研究(B))研究成果報告書』 独立行政法人国立特殊教育総合研究所
http://www.nise.go.jp/kenshuka/josa/kankobutsu/pub_f/f-140/f-140_1.pdf (2011. 12. 26)
上杉美恵子 2007 「思いや考えを適切に書くことへの意欲を高める学習指導の工夫」『平成18年度1か年及び6か月長期研修員研究報告書』 岡山県教育センター
<http://www.edu-ctr.pref.okayama.jp/chouki/study/h18seika/pdf/uesugi.pdf> (2011. 12. 26)

<参考文献>

- 青森県教育委員会 2010 『平成22年度学習状況調査』
旺文社編 2010 『2011年受験用全国高校入試問題正解英語』 旺文社
太田洋 2010 「中学校英語教師に求められる役割」（平成22年度青森県総合学校教育センター中学校英語指導法研修講座講義資料）
小菅和也 2010 「ライティング指導で重要なこと」『英語教育6月号（第59巻第3号）』 大修館書店
三森ゆりか 2009 「英語力の根底にあるべき母語力」『英語教育8月号（第58巻第5号）』 大修館書店
鈴木寿一 2009 「音読こそがすべての基本—音読指導で生徒の英語力を向上させるためのQ&A」『英語教育11月号（第58巻第8号）』 大修館書店
東谷保裕 2009 「音読から暗唱・暗写、そして自己表現活動へ」『英語教育11月号（第58巻第8号）』 大修館書店
松畑熙一 2000 「ライティング能力の重要性」『英語教育11月号（第49巻第9号）』 大修館書店
文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説 外国語編（平成20年9月）』